

絵本に教えられた “ダイバーシティ”

D-YCAP 理事
横浜市立大学名誉教授
齊藤 毅憲

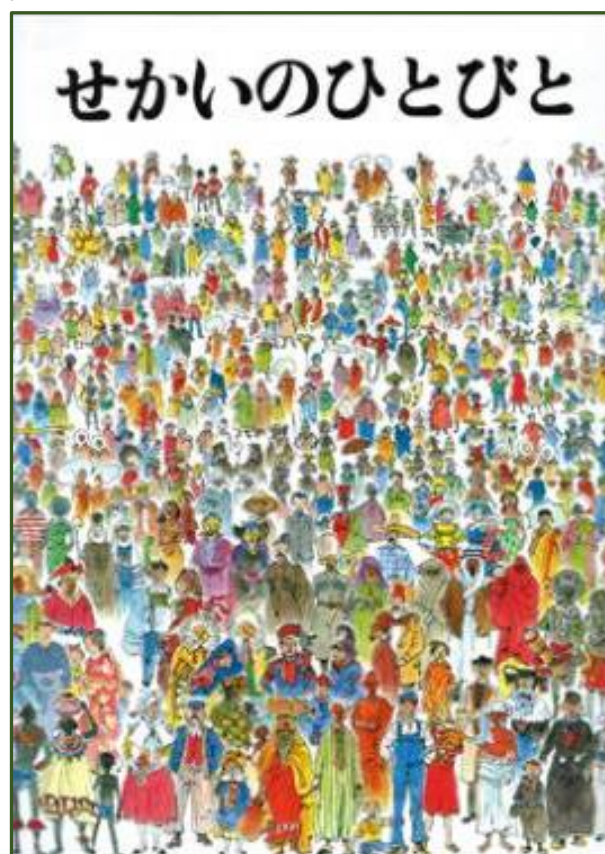
家にあるピーター・スピアー(絵と文)、松川真弓(訳)の『せかいのひとびと(PEOPLE)』(1980. 評論社、1982年)を見ていた。B4版であるから、子どもには大きな本である。表紙と裏表紙には、世界の人びとがきわめて多く描写されており、数えることができないほどである。当然のことながら、人びとは民族衣装をまとっている。

最初のページには、大西洋をはさんで北米・南米の大陸とヨーロッパとアフリカ大陸の一部が載っている地球と星が輝く夜空の絵がある。そしてページをめくると、全裸の男女が後姿で手をつないで、広大な緑豊かな自然の中に立っている。次のページを見ると、ギリシャの詩人メナnderの言葉が載っている。「“汝自身を知れ”とはよくいうけれど、これはうまくないね。“他の人たちを知れ!”。このほうがききめがあるさ」とある。

自分ではなく、他人を知ることが大切であるという。さらにページをめくっていくと、世界には多くの人びとがおり、「生まれたときから、みんなひとりひとりがちがっているんだ」と述べている。そして、このちがっていることをいろいろな面から描写している。

生まれたときは、みんな小さいが、大人になると、大きい人も、小さい人も、そして、中ぐらいの人もいる。はだの色も違うし、目もいろいろある。鼻、口、耳、顔、かみの毛、衣装も違っている。そして、性的、能力、好みもちがっている。

どこの国の人も遊ぶのは好きであるが、遊び方はちがうとし、いろいろな国の遊びを絵で紹介している。日本の場合、指ずもうと将棋があげられている。



【絵本】せかいのひとびと 評論社(日本)
絵と文 ピーター・スピアー 訳 松川真弓

さらに、食べ物、宗教、言語にもちがいがあるし、仕事の種類も多く、働いているといっても、それぞれにちがった仕事を行っている。そして、働きたくても、仕事のない人もいる。そこで、リッチな人もいるが、プアーな人もいる。また、人びとに命令する力をもっている人もおり、ちがいを示す身分とか、地位とか、階級という仕組みをつくって人間は生きている。ともかくも、この地球上には、いろいろな人びとが存在しているとピーター・スピアーは言う。しかし、この地球上で、われわれ人間はちがっても同じ空気を吸い、同じ太陽に照らされているわけである。そして、後世まで名を遺す人もいるが、しかし誰もすべてが死ぬことになる。

このようなちがいを絵と文章で表現した最後のメッセージは、次のようである。「ある人たちは、自分と違っているだけで、よその人たちをきらう。そんなことっておかしいよ。その人たちだって、ほかの人から見れば、ちがっているってことを忘れているのだ」。

ここには、ちがいをしっかり認めることの大切さ示している。そして、だれもがすべて同じであったら、死ぬほど退屈であるといい、「ほらね。わたしたち、みんながみんなそれぞれこんなにちがっているって、ステキでしょ？」でメッセージを終えている。

違いはいろいろな要因でつくられており、人間はひとりとして同じではなく、その違いを認めることが大切であるとの絵本は教えてくれている。違いのあることをきらったり、差別するのではなく、むしろ価値あるものとして、ステキであるというのが、まさにダイバーシティの主張になるべきである。

わが国では、女性の企業内での活用や障がい者の能力発揮などの面から“ダイバーシティ”が重要であるといわれているが、ピーター・スピアーのこの絵本をみると、ちがいは男性と女性、健常者と障がい者といったところのものではなく、むしろきわめて多様な要因で作りだされていることがわかる。

違いがあることだけで人を差別してはいけない。人間にはちがいがあるので、価値があり、ステキであり、死ぬほど退屈には陥らないのである。私も本当にそう思う。

(2017,8,3)